

バナラス・ヒンドゥー大学(BHU)@バラナシ、インドからのビデオ

はじめに

当学会学会誌『海外日本語教育研究』第16号でご報告したとおり、協力隊まつり2023においてNPO海外日本語ネットが「海外の日本語学習者作成のビデオクリップ上映会」を開催しました。この記事は、上映会に作品を寄せてくれたバラナシで活動中のJICA海外協力隊日本語教育隊員吉田知恵さんのご協力の下、バナラス・ヒンドゥー大学 (BHU)における日本語教育事情の概要をはじめ、ビデオ作成に参加してくれたBHUの学習者たちの日本語学習の背景や環境、ビデオ完成までのいきさつなどをまとめたものです。

NPO海外日本語ネットのビデオ作成募集の呼びかけに対し「日本語を使うアクティビティとして活動に取り入れたい」と吉田さんが応えてくれたのが3月上旬で、4月22日・23日の上映会までの約1か月半、私は彼女とSNS上でやりとりを繰り返しました。特にパイロット版が届いてからは「知りたい！聞きたい！」ことが湧き出てきたので、ビデオ作成の過程やビデオに登場する学習者たちについて質問を重ね、彼女はそれらに丁寧に答えてくれました。その中で、学習者同士、そして学習者と教師が互いに豊かになっていくような風景を勝手に想像した私は、自分が聞き得たものを何らかの形で残しておきたいと考えるようになりました。そしてその気持ちは、上映会后PADLET上に書かれた「(ビデオ作りによって)私たちの日常が楽しくて意味深くなってきた」「(ビデオ作りは)素晴らしい学習体験だった」という学習者たちのコメントを目にしたことでより強くなりました。学習において“素晴らしい内的体験をすること”の重要性を再確認した気がしたからだと思います。

彼女とのやりとりをまとめ直し、それを彼女に確認してもらいながら仕上げたものがこの記事です。ビデオを見ながら追加情報としてつまみ読みしてくださるのも歓迎です。まずはビデオが見たい！という方は、現在酷暑真っ只中のバラナシの散策をぜひお楽しみください。そしてフォトジェニックな町を紹介してくれている彼らのことが気になったら、また戻ってきてください。この記事があなたの「知りたい！聞きたい！」に少しでもお役に立てれば嬉しいです。



👉吉田知恵さんはこんな方👈演劇科出身で、ミュージカル劇団に所属した後ヤマハポピュラーミュージックスクールでヴォーカル講師を務める。その後JICA海外協力隊の音楽隊員としてサモアへ(1993-1995)。音楽隊員としては他にラオスも(2003-2005)。インドネシア・バンドンに音楽留学したのをきっかけに1999年に日本語教師としてのキャリアもスタートさせ、国立パジャジャラン大学と私立マラナタ大学で日本語を教える。2016-2018年の間も断続的にインドネシアで日本語教育に関わり、インドネシア滞在は通算8年。モロッコ・モハメディア(2008-2010, JICAシニア海外ボランティア(当時))、エジプト・アレキサンドリア(2010-2014, JFの現地雇用)での日本語教授経験もある。2022年8月にJICA海外協力隊日本語教育隊員としてバラナシに赴任し、現在に至る。日本語を学習している学生たちと一緒に「古事記」「桜姫」「牡丹灯籠」「三太郎！」などの時代劇を日本語で上演することをライフワークとしてきた。

バラナシについて

インド北部ウッタル・プラデーシュ州バラナシ県の県都であり、ガンジス川沿いに位置するヒンドゥー教の一大聖地。人口約120万。映画『ガンジスに還る』（原題：HOTEL SALVATION / MUKTI BHAWAN）（2016）の舞台になった街

吉田：ヒンドゥー教の人々が死期を前に必ず訪れたい場所のようです。最近はそのような宗教的な意味合いだけでなく、単なる観光スポットとしても人気で、ガンジス川沿いに白いテントホテルが立ち並ぶなど、開発が進んでいます。また、特に伝統的な音楽の愛好者が集まって修行する場所という感じもあります。この間もインド全土から古典音楽の第一人者が大集合し、お寺で夜な夜なコンサートが行われていました。午後8時頃から朝7時頃まで入れ替わりでいろいろなアーティストが出ていました。このようなコンサートには、現地の人々のほか、外国人のコアなファンが集まります。バラナシでの大がかりな音楽フェスは年に2回、2月と4月に開催されます。



ガンジス川沿いにあるガートでは、夜になると祈りを捧げる僧侶たちの儀式がおこなわれます。川岸は人々で埋め尽くされ、川の上もボートに乗って見物する客でいっぱい



床屋さんの店先に座るカウ



道端にはおいしそうな屋台が並ぶ



バナラス・ヒンドゥー大学とは？

1916年設立の歴史ある国立大学で、学生数は約2万。通称BHU

吉田：総合大学で、IT、医学部、アーユルヴェーダ学部、舞台芸術学部、インド占星術学部、農学部など、さまざまな学部が広大な敷地内に点在しています。インド28州の中でも経済水準が最貧と言われるビハール州（東の隣接州）からの学生が多いです。

BHUの日本語教育事情は？

吉田：文学部外国語学科の中に日本語セクションがあり、1990年より公開講座が始まりました。当時現地に住んでいた鈴木千晶さん（現在国際交流基金の専門家でデリー在住）がBHUで15年日本語を教えていました。もともとヒンディー語の勉強のためにBHUに留学していた鈴木さんですが、数少ない日本人として白羽の矢が立って、日本語ディプロマコースで教えはじめた、ということです。

2016年からは公開講座がなくなり日本語主専攻の学部教育に切り替わっています。現在はインド人の先生が3名で3年制のコースを教えています（3年生7名、2年生22名、1年生17名）。JICA海外協力隊は私が新規の派遣で、今は課外クラスや、他学部の学生たちを集めて日本語を教えています。

※インド全体の日本語教育については、「海外の日本語教育の現状 2021年度日本語教育機関調査より」PP38（国際交流基金）を参照 [HTTPS://WWW.JPF.GO.JP/J/PROJECT/JAPANESE/SURVEY/RESULT/SURVEY21.HTML](https://www.jpf.go.jp/j/project/japanese/survey/result/survey21.html)

—課外クラスや他学部の学生たちに教えているというのは、公開講座ではなく、どんなもの？

吉田：課外クラスは日本語主専攻の学生たち対象のいわゆるエキストラクラスです。主専攻の学生たちが気が向いたときに来てくれます。ここでは、講義中心の正規科目ではなかなか学ぶチャンスのない、日本語を運用する機会を増やすことを目的に、「(わからない場合も)とにかく日本語だけでコミュニケーションを取り続ける」ように促しています。ちなみに今回のビデオ作成は、彼らの期末試験と見事に重なってしまったため参加できませんでした。ビデオ終盤に歌を歌うことで参加することができました。BHUは大きな大学なので、他学部には純粋に日本文化ファンやアニメ大好きな学生がそれなりにいて、公開講座はいつから募集するかと度々訊かれる度に「ごめんなさい、今はないんです」とお断りしていました。それが日本人として本当にいたたまれなくなり、「そうだ、いっその学生たちを集めて、公開講座ならぬ日本語大好きクラブを自力で立ち上げよう」と思いました。2月上旬からひっそりとトライアルクラスをはじめてみたのです。はじめ8人ぐらいが他学部から通ってくるようになり、みんな、それはそれは日本に思い入れがある人たちなので、1回1回が貴重な勉強のチャンス！と本当にいきいきとうれしそうに集っています。かくして他学部混成クラス「日本語クラブ」が誕生しました。そしてその学生たちが、試験もなんのその！今回のビデオ撮りもぜひやってみたくないとノリノリだったので、この企画に乗っかりバラナシの街のあちこちを散策しました。

—「日本語クラブ」の内容は？

吉田：入門コースとして発足した「日本語クラブ」ですが、開講時からすでに自分の名前をカタカナで書けたり、最近では独学で漢字をどんどん使って文を書いているような学生と、ゼロ初級の女の子たち…とレベル差がけっこうあるので、それぞれの実力に合わせて、たとえば「書く」活動も、単語レベル⇄文レベル、ひらがな⇄漢字混じり…と、個別に加減しています。クラブは週に2回、1時間半ずつおこなっています。コアメンバーは現在6人で、ビデオに参加している5名（うち1名は6月に卒業済）の他に、学業のスケジュールが忙しくて今回のビデオに参加していない2人の女子学生（文学部サンスクリット学科+BHU女子大学地質学部）がいます。このクラスで知り合ってから仲良くなり、いつも“わちゃわちゃつるんで”楽しそうです。



日本語クラブの5名、日本人ゲストとともに



バラナシ中に牛はいっぱいいますが、もちろん大学構内にも！
中でもこの牛は、節目節目に「悟りを受けるかのように必ず現れる」のだそう。

吉田：この日本語クラブは大学から認可されたクラスではないので、修了証のようなものが何も出ません。それで、最近ある学生（後述のケニーさん）はインド教育省がやっているオンラインプラットフォームの日本語レッスンも受講して、将来的にはそこの試験を受け、レベル別の修了証をもらうことを目標にがんばると言っています。

ビデオのテーマ決定や撮影計画は？

吉田：私たちの街バラナシを紹介したい！という声が学習者たちから自然にわき上がりました。撮影は3/26, 3/30, 4/2, の3日間を設定し、初めの2日間は街の散策による撮影、最終日の4/2はガンジス川で船に乗り込み、皆で日本の歌を歌う予定でした。街での撮影は予定通り行えましたが、ガンジス川での撮影は一週間延期になりました。というのも、急遽来られなくなった学生が出たのと、一週間延期すれば主専攻の学生たちも舟に参加できそうだったからです。しかし、急激な暑さで私が体調不良になり、なんとその延期した撮影日4/9に病院で検査を受けなければならない事態となってしまいました。泣く泣くガンジス川での舟シーンは取りやめ、翌日4/10に大学構内で主専攻の学生も一緒に歌をうたうことになりました。

撮影場所の選定や準備は？

吉田：私はまだバラナシのことがよくわからなかったので、彼らに意見をききながら、どこに行く？と相談してみんなで街の見どころスポットを選び、そこで行いたい簡単な説明を考えました。彼らの日本語力はと言えば、自己紹介がようやくできるかな？のレベル(撮影当時「いろどり」入門テキスト第3課)です。みんなが話したい内容を出し合い、それを私が一旦セリフにしてみます。それを基にまたみんなでアイデアを巡らせながら詰めていきました。演劇科出身ゆえにセリフを考えるのはお手のもの☺、みんなで作り上げたセリフを何度も何度も練習し、いざ現場に乗り込みました！この「ビデオで日本語をしゃべってみよう！」活動が発端となり、学生と一緒にバラナシの街をあちこち散策したり話したい内容をセリフにして何度も練習したりする時間は、私にとってものすごく楽しいものでした。

編集作業は？

吉田：散策メンバーの一女子学生(後述のケニーさん)がほぼすべてを一人で仕上げてくれました。心理学部の大学院1年生で、日本語は勉強したことはないのですが日本の文化や生活に興味津々の、そしていろいろなスキルが高い頑張り屋さんです。彼女はいまや、私の私生活でもなくてはならない片腕的な存在です。スマホひとつで撮影していると、周囲の騒音や立ち位置の関係で学生たちの声が聞きとりにくいことも発生します。そんな箇所は声だけ新たにオーバーダビングして編集し直したりしたので、撮影よりはるかに長い時間ビデオ編集に手間がかかりました。実際に形にしてみると、当初の予定の3分半という枠には到底収まらないことが判明し、そぎ落とせるところをカットしていきました。ケニーさんと二人三脚で、何度となくチャットで気になるところを私が指摘⇒ケニーさんが直しを加えるという作業を続け、時には深夜にまでおよびました。そんな最中に彼女の愛犬が急死してしばらく作業ができなくなるハプニングもありました。最後、一部に字幕を付ける作業をもうひとりの女子学生(後述のカニさん)が手伝ってくれ、「インドBHUの学生とゆくバラナシ巡り」というタイトルを右下にはめ込んで無事完成！となりました。

ビデオに出ている学習者たちについて

①

②

③



①大学の正門をバックにした冒頭とエンディングショット：

主専攻組と「日本語クラブ」のミックス。一番左のシャラッドくん（商学部3年）、その隣の隣のアナントくん（医学部4年）、前列に戻ってカニさんとケニーさん（どちらも心理学専攻の大学院生）の計4名が街の散策メンバー。

②冒頭後のロールプレイシーン：

「日本語クラブ」の4人の大学生大学院生たち。左からアナントくん（①既出）、アユーシュくん（商学部2年）、ケニーさん（①既出）、シャラッドくん（①既出）。ケニーさんが日本人っぽい顔立ちなので説明を加えるためこのシーンを取って後で追加。このシーン録りはなかなか難しく、立ち位置、見せ方は吉田さんによる演劇的手法が大いに活かされている。

③終盤の歌シーン：

アクティビティクラス*のメンバー（主専攻と「日本語クラブ」ミックス）。皆で歌っている桐谷健太の「♪海の声」はアクティビティクラスで吉田さんが紹介した歌のひとつで皆のお気に入り！ *アクティビティクラスについては 次のスライドで説明

吉田：街の散策メンバーは「日本語クラブ」の大学生大学院生で、彼らは普段からVLOGなどに親しんでいます。メンバーは①の説明どおり女子学生2名男子学生2名の4人で、ケニーさんとカニさん、一番よくしゃべり、ナレーションを入れている男子学生がアナントくん、もう一人がシャラッドくんです。②のロールプレイに出ているアユーシュくんは散策時に帰省していて参加できず、でもどうしても出たい！と連日電話をかけてきていたので、このシーンに登場してもらうことにしました。アニメ好きな学生です。

散策メンバー4名の普段の「日本語」活動は？

吉田：カニさんとアナントくんはいわゆるアニメオタクです。彼らはジブリから最近のものまで、本当に幅広く見ていて、ほかの学生におすすめを紹介したりして啓蒙活動をしています。特にアナントくんは「ぜひこれを見てください」とおすすめアニメを送ってきます。「四月は君の嘘」は、必見！と言われました。最近ミュージカル化されたと教えてらびびっくりしてました。「僕だけがいない街」というアニメや、一番最近では「四畳半神話大系」を彼から勧められて見ました。

お料理好きなケニーさんは、アニメの視聴は少なめですが、日本人YOUTUBERのお料理番組などをよく見ているそうです。シャラッドくんは、真面目に語学習得の目的で、はじめて見聞きする日本語を「日本語クラブ」で勉強し始めました。

先ほど出てきた「アクティビティクラス」とは？

吉田：主専攻と「日本語クラブ」、どの学生でも参加でき、基本的に週一回開いています。

個人的には日本の歌や踊りをしこむ時間帯のつもりでいます。いつか文化祭で披露したいという野望もあります！「♪海の声」アンジェラ・アキの「♪手紙」を紹介し、穴埋めディクテーションをしたりしています。BABY METALを紹介して、「♪KARATE」の歌詞を説明してみんなであうたってみたりもしました。一部振付もやってみましたが、あまりダンサーがいないと判明したのでこちらは頓挫中です。

歌以外に今までに実施したものとしては、まずは「谷川俊太郎シリーズ」です。「かっば」と「たいこ」を音声で表現することで高低アクセントを練習し、暗唱します。その後身体表現を含めてパフォーマンスとして構成する予定です。

「かごめ」「ちゃつぽ」などの伝統的な遊びも紹介しました。「かっば」や「たいこ」と同様に「ちゃつぽ」もそのうちプチ演劇に仕上げる目論見を立てています。

長かった試験期間が終わった5月中旬、一段落してみんなが故郷に帰る前には、劇団☆新感線の『五右衛門ロック』（スペクタクル時代劇）の鑑賞会をおこないました。これには、日本語専攻でも日本語クラブでもないけれど、同じ寮に住む友だちが見たいと言っています、と学生から報告を受け、ぜひどうぞ！と誘いました。やって来たのは『ルパン3世』シリーズをすべて見ているという筋金入りのマニア。ゴエモンという名前にピンときたようで、『五右衛門ロック』がルパン3世へのオマージュ作品であることをしっかりと見抜いてみんなに説明してくれました。

また、4月中旬に日本人2名（以前BHUで教えていた前述の鈴木さんとその友人）を招き、いろどり入門&1年生レベルながら日本語だけでQ&Aを続けるというイベントを実施しました。鈴木さんに関しては、必要最小限の情報（名前や住んでいる所）をまず自己紹介してもらい、その後、学生からの質問に答えるうち、徐々に実は以前BHUで教えていた大ベテランの先生だった！ということがわかるような展開になりました。みんなでクイズのように白熱したやりとりがおこなわれ、「おお！」と歓声があがった時には、日本語がちゃんと機能している！と会場一同、大興奮の渦に！

このように、まさに教師の独断と偏見による、趣味に走ったカリキュラムです。今後は藤井風などをやりたいです。「♪死ぬのがいいわ」はあまりにもディクテーションに不向きなので「♪優しさ」あたりを検討しています。

食べ物とか折り紙とかが一切ないのが特徴かもしれませんね。

このクラスを通して別学年・クラスのメンバーとの親睦を深めたり、レベルが上の学生が、初級クラスの学生に教えてあげられる機会を意図的に作っています。

ビデオ作成における学習者たちの様子、変化について

吉田：出かける度に行く先々で予期せぬ人やモノに出会う不思議王国インド。散策撮影時にはどうなることかと思いましたが、アニメファンのカニさんやアナントくんが底力を発揮し、知っている言葉をここぞとばかり駆使してリアクションをしてくれたので、会話がはずみました。また、彼らの吸収力の凄まじさと早さにも驚かされました。撮影を重ねるごとに、カメラの前でどんどん上手になってゆく学生たちは「伸びしろ無限」。そんな彼らがまぶしかったです。なにかが目の前で起こっても、それに咄嗟に日本語で反応していましたし、現場でいろいろな説明を付け加える能力や言葉のチョイス（「ちなみに」など）にも感心させられました。

ケニーさんは、はじめ、興味はとてもあるけれど、自分の日本語レベルに自信がなくて、長い台詞は、すべて友だちのカニさんに代わりにやって～！とお願いして、ちょっと引っ込んでいるようなところがありました。ところが、アッシーガートを撮影する当日、いつも頼っていたカニさんが急に欠席となり、その日は、ナレーターや進行役のアナントくんのほか、ケニーさんの出番が一気に増えることに。はじめはドギマギしている様子でしたが、途中から肝がすわったのでしょうか。なんとかやりこなそう！と今まで以上に熱心に、そして、長い台詞は何度もリハーサルして、だんだん喋り慣れてきた頃を見計らって撮影に臨みました。この日を境に、ビデオでの自分の役回りを理解して、もっとがんばろう！と積極的に発言するようになりました。

（語学習得の目的で「日本語クラブ」で初めて日本語を始めた）シャラッドさんは、はじめはシャイでほとんどしゃべらないおとなしい学生でしたが、ビデオ作りをつうじて、ほかの学生との絆が生まれたようです。卒業直前の最終試験ぎりぎりまでがんばってクラスに参加、最後に「このクラスに参加できて、本当によかったです。ありがとうございます。故郷マディヤ・プラデーシュ州に帰っても日本語の勉強を続けます」と丁寧にあいさつをして大学を巣立ってゆきました。



ケニーさん、アッシーガートにて

ビデオ作りを終えて

上映会会場では学習者へのメッセージカード記入と併せて、PADLET上にコメントを残せる形にし、会場でビデオを見た参加者とビデオを作った学習者のやりとりを可能にしました。「はじめに」で紹介した学習者のコメントはPADLET上のものです。学習者からのコメントは次のようなものでした。（書き手の了承を得て、一部表記変更&助詞追加をしています）

- ・一番大変だったのは、うまくいくまで何度もカットをやり直すことでした。しかし、それは素晴らしい学習体験であり、みんなと一緒にとても楽しかったです。完成したビデオを見ると、うれし泣きしそうになりました。（アナントくん）
- ・ビデオを作るのは楽しかったです。たくさんチャレンジしました。TRY&ERRORの連続で最後にこのビデオになりました。このビデオでインドのことがもっとわかるとうれしいです。（ケニーさん）
- ・ビデオを作るのははじめてなので、みんなと一緒にいろいろな場所に行っておいしいものを食べて買い物もして、とても楽しかったです！良い意味で疲れしました。先生にも言った話ですが、先生のおかげで私たちの日常がすごく楽しくて意味深くなってきたと思います。見てくれてありがとうございました！そしてぜひぜひインドに来てください！（カニさん）

吉田：ビデオ作りを終えて、あらためて感じていること。それは、先に述べたように、彼らの日本語運用能力が日を追うごとに進歩していったという驚きのほか、みんなとの距離感がとても縮まったということです。それまでも、学生間でいい関係が育まれていると思っていましたが、ビデオ撮りのためにいっしょに学外に出かけ、ご飯を食べたり、ディスカッションを重ねるうちに、インド人だからこそ説明可能な、文化的・慣習的な要素（木の種類、お寺でのお詣りなど）について、お互いに知恵を出しあって細かいことまで議論し、遠慮なく思うところを言い合える関係に成長してゆきました。また、学生たちがビデオに出演するので、私は必然的にカメラマンとして彼らの姿を撮影する役割に回りましたが、嬉しかったのは、私もひっくるめて、みんながバラナシ巡りのキャラバン隊という意識でいてくれたことです。気づかぬ間に、学生と一緒に並んで歩いている私の姿なども撮影して、それを編集時に上手に使ってくれたので、一緒に楽しんでいる様子ごく自然に伝わるようなビデオができあがりしました。日頃、教室ではどうしても「先生」と「学生」という役割に分断されてしまうのが宿命ですが、そういう線引きがなくなって、ひとつのグループのメンバーとして参加できたことが、今回の試みでたどり着いたあらたな地平となりました。クラスでは、また先生に戻ったとしても、彼らと同じ目線・思いでビデオ作りに励んだ体験は、今後の関係性にきっとよい影響を与えてくれるのではないかと思います。

おわりに

ビデオ作成を通して、彼らの日本語運用能力が少なからず高まったであろうことは十分想像できます。でも「そんな」ことよりわくわくしたのは、日本語での活動やその活動上の関わりあいにおいて、中心的な参加に発展していくことによって生まれたであろう「自信」であったり、（しつこいようですが）「（ビデオ作りによって）私たちの日常が楽しくて意味深くなってきた」「（ビデオ作りは）素晴らしい学習体験だった」という学習者たちのコメントや吉田さんの言葉の中に現れる「絆」や「関係性」というワードでした。また、「主流」の言説に決して囚われていない彼女の実践です。

学習者たちの“素晴らしい内的体験”を華麗に仕掛けた吉田さんのハタラキは、彼女が持つ演劇的手法もさることながら、学習者個々の体験を深い懐で受け止め、無条件に共感し“揺さぶられる”ことで、学習者と教師がとともに豊かになっていくような、そんな教師の役割を果たしていたことなのではないでしょうか。

学習者同士の「つながり」を促進する仕掛けや、いわゆる「先輩学習者」が「後輩学習者」に教える仕掛けからは社会文化アプローチな学びが浮かび上がりました。個人的には、たとえば「正統的周辺参加」をもとに考察したり、ドルネイのL2 MOTIVATIONAL SELF SYSTEMを理論的枠組みとしてBHUの現場を調査研究したくもなり、わくわくした次第です。

NPO海外日本語ネットは、協力隊まつりのイベントとしてだけではなく、今後も随時海外の日本語学習者作成のビデオクリップを紹介していけたらと考えています。ご興味のある方、ぜひお声がけください！

（NPO海外日本語ネット・当学会世話人 内山聖未）

おまけ

上映会の参加者たちが会場で書いたメッセージカード(写真左)を学習者の元に送りました。

その際 未使用のカードも同封したところ、「日本語クラブ」のみなさんがセタの短冊に見立てて願い事を書いてくれたといううれしいお知らせが!

見立てて願い事を書いてくれたといううれしいお知らせが!

「みんな、それぞれの願いごと

を真剣なまなざしで日本語で

書いて、できあがった嬉しさ

はひとしお♡」と、吉田さんが

SNSに投稿してくださいました。

